

保健室の窓から

水波 佳津子

東京都立戸山高校養護教諭

戦後、女と靴下は強くなった、もはや女性保護など不要だなどといった声を聞くようになって久しくなりますが、もっとも女性の特質を発揮し、子どもを生み育てることに、直接タッチしてお仕事をなさる助産婦の方々の実感はいかがでしょうか。

私の周囲の助産婦の方々の意見では、個々に接すれば、身体的にも精神的にも十分に発達していない未熟さの残る女性も多く、ほんとうに賢く強くなったのか疑わしいという声を聞きます。幼年期・学童期・思春期それぞれ成長の過程でもっときちんと体のこと、生きる姿勢を教えられていればと、家庭教育、学校教育に望むことも多くおありなのではないかと思います。

私は看護婦養成校(旧制女専)を卒業、臨床に従事しましたが、患者のケアも大切だが、それ以前に病気にならないための予防教育をしたいと保健婦学校に進学、養護教諭の道を選びました。

健康に生きることは人間の基本的権利ですが、教育を受ける権利も健康であればこそ保障できます。常に子どもの側に立ってそのすこやかな成長発達を支援したい、そんな願いで仕事を続けてまいりました。

足長のカッコよく成長したかにみえる高校生も、身体には近年、成人病といわれる疾患すべてが出そろっている感じです。胃潰瘍、糖尿病、高血圧、腰痛、リウマチ、痛風すらあります。このほか病気といえないが、気分が悪い、だるい、くたびれた、立ってられないといった類の不定愁訴、ヤセ願望からくる体重減少、低血圧、貧血、

生理不順、無血月経などもみられます。

競争社会にあって、成績、受験、親の過大な期待などの重圧にひしがれ、落ちこぼされ、心を病み、これが10代の若者かと目をうかがうほど、くたびれた老人のような生徒が保健室にやってきます。つい最近なされた文部省の調査では、学校の保健室利用者は1日あたり、小学校28.7人、中学校31.3人、高校31.7人、平均して30.6人という結果が出ています。

来室理由には体の不調、けがのほか、さまざまな悩みの相談もあり、“駆け込み寺”としての保健室が浮き彫りになっています。

身体的な症状を訴えても、心の問題が内在していることが多くあり、けが、病気の手当とともに心の相談活動も行なっています。保健室ではまずこの子らの病む体や心をしっかりと受けとめ、受容し、心を開かせ、生徒を囲む担任、親、地域と連帯し生きる力を引き出すよう努力しています。

ここでも、助産婦の世界同様人手不足。私の場合でいえば、1231人の生徒に1人の養護教諭という状況のため、身体的健康管理だけでも相当な仕事量になります。加えて、個々の心の問題にふれ、生きる力を育てるとなると1人では到底無理です。複数配置など人の確保要求が切実です。

人間の誕生、成長、かわる年代は異なっても、人間の生命を守りはぐくむ看護職の仕事。私たちは大きな幹でつながっているのを感じます。お互い、緊密に情報や研究・実践を交流し連帯しあって、このすばらしい仕事を輝いてよりよく進めたいものと思います。